

**Welcome to
TOEFL Mail
Magazine!**




立春も過ぎ、暦の上ではもう春ですね。入学試験シーズンも到来し、足早に会場に急ぐ受験生らしき姿に「頑張れ」と心の中でエールを送りたくなります。

TOEFLも一種の入学試験。人生を賭け、夢を賭けて受験される方がたくさんいらっしゃいます。今回のメールマガジンでは、TOEFL受験者に圧倒的人気の「アメリカ留学」を特集します。

憧れの留学先University of Californiaの日本窓口、カリフォルニア大学東京スタディセンター所長が語る新しいプログラムのビジョンとは？新シリーズ「世界で学ぶ!!はじめの一歩」では、公的なアメリカ留学アドバイザーからの情報をたっぷりご紹介！

それでは、今号のTOEFLメールマガジンをどうぞお楽しみ下さい。

国際教育交換協議会(CIEE)
日本代表部 TOEFL事業部

 メールアドレスが変更になった方は、こちらのアイコンをクリックのうえ、ご連絡下さいますようお願いいたします。

 メールマガジンに登録する

巻頭特集：「アメリカ教育システムの魅力」

カリフォルニア大学・東京スタディセンター所長 福来 寛 先生にインタビュー

日本と米国の教育システムはかなり異なっていますが、両国の学生が互いに学びあう機会があります。それが「留学」です。文化や言語などの相違点をいかに理解し、また魅力を感じることができるようになるかがキーポイントになるでしょう。今回は、多くの人々が憧れるカリフォルニア大学の窓口を勤めるカリフォルニア大学東京スタディセンターをとりあげました。米国大学教育の魅力やアメリカの大学から見たTOEFLについてのご意見などを所長の福来寛先生に伺いました。

シリーズ：世界で学ぶ!!はじめの一歩（アメリカ編）

日米教育委員会 教育情報部 コーディネーター 渡邊 美由紀 氏インタビュー

CIEEは各国への留学を考えている皆さんを応援しています!!このシリーズでは、留学への「はじめの一歩」を踏み出すための情報をお伝えしていきます。分かっているようで実ははっきりと把握できていない各国の留学情報を、公的情報機関を訪問して専門家に伺います。初回は、日本からの留学先として最も人気の高いアメリカを取り上げ、日米教育委員会の教育情報部コーディネーター 渡邊 美由紀さんにお話を伺いました。

好評連載：言葉の玉手箱

ETS公認コンサルタント 川手-M 恩 先生による言葉の新発見

英語に限らず外国語を学習していると、言葉の世界の奥深さに気付かされます。古来の日本人は言霊（ことだま）と評して、言葉には霊が宿り、見えざる力を働かすのだと考えました。使い慣れた短いフレーズの中にもコミュニケーションを左右するほどの力があるのです。ご好評頂いている連載「言葉の玉手箱」では、ETS公認コンサルタントの川手 ミヤジェイエフスカ 恩先生が、異文化間コミュニケーションにおける言葉の使い方の重要性に焦点をあて、興味深く解説してくださいませ。言葉の世界の面白さをお楽しみください。

TOEFL®受験者インタビュー

これまでのTOEFL受験者インタビューでは、これから海外へ留学する、あるいは英語力をアップするために英語の勉強に取り組み、TOEFLと格闘している方々にスポットを当ててまいりました。

今回は、「私もTOEFLを受けました」と題して、TOEFLスコアを携え、既に海外にて活躍している元TOEFL受験生に、勉強法や留学を志す方へのアドバイスなどを伺いました。まっすぐ自分の将来を見据えて勉強に打ち込まれていた様子が目に浮かぶようなインタビューとなりました。

研究セミナーのご報告

英語でのコミュニケーション能力と聞くと、「聞く」「話す」能力を思い浮かべる方が多いでしょう。しかし、コミュニケーションとは、音と文字、つまりオーラシー（話す聞く）とリテラシー両方を総合的に含んだものでなければ意味がないのです。

次世代TOEFL(Next Generation TOEFL)のコンセプトもまさにそこにあります。TOEFL事業部では、真に求められる英語運用能力の育成にスポットをあてた教育者対象の「第1回TOEFL研究セミナー」を昨年12月に開催いたしました。Academic Writingの効果的な学習方法と指導方法をテーマにした今回のセミナーについて報告いたします。

巻頭特集： 「アメリカ教育システムの魅力」



カリフォルニア大学・東京スタディセンター所長 福来 寛 先生にインタビュー

日本と米国の教育システムはかなり異なっていますが、両国の学生が互いに学びあう機会があります。それが「留学」です。文化や言語などの相違点をいかに理解し、また魅力を感じることができるようになるかがキーポイントになるでしょう。

今回は、多くの人々が憧れるカリフォルニア大学の窓口を務めるカリフォルニア大学東京スタディセンターをとりあげました。カリフォルニア大学9校と日本の提携大学の間で行われる交換留学プログラムの運営の他、時代のニーズに合わせて、日本でのインターンシッププログラムの開発など新しい試みにも次々にチャレンジされています。米国大学教育の魅力やアメリカの大学から見たTOEFLについてのご意見などを所長の福来 寛先生に伺いました。



福来 寛 (ふくらい ひろし) 氏 プロフィール

【経歴】

現：カリフォルニア大学・東京スタディセンター所長 及び
カリフォルニア大学サンタクルーズ校 社会学准教授

1945年 宮城県生まれ

1985年 カリフォルニア大学リバーサイド校社会学部大学院修了 (Ph.D.)

英語共著に「人種と陪審」(グスタボ・マイヤー賞受賞)、「コモン・デスティニー」などや、日本語論文に「独自の国民の司法参加制度確立と国際社会の日本評価」(「月間司法改革」2001年3月号)、「待たれる裁判院制度導入」(「毎日新聞・発言席」2002年2月4日など)

スタディセンターの役割

- 最初に、カリフォルニア大学東京スタディセンターの活動内容をご紹介します。

福来 1963年に日本のICU(国際基督教大学)と、UC Systemというカリフォルニア大学9校の機構が提携し、相互の学生が1年間現地の授業料免除で留学できる交換留学プログラムを始めました。2003年にちょうど40年目を迎えます。カリフォルニアはアジアにとってのアメリカの玄関口ということもあり、1962年のフランス以降、カリフォルニア大学にとって、日本は3番目という早い段階で提携を結んだ国です。ICUから始まった協定校も、東京大学、東北大学、京都大学、上智大学、同志社大学など国立・私立大学を合せて計14校になります。1年間でおおよそ120~140名を派遣する交換留学制度となっています。

本スタディセンターでは、カリフォルニア大学から来日する学生のサポート、国内の14の提携校から選出する日本人学生のインタビューや、その留学までのサポートをしています。

また新しい試みとして、日本企業で働く機会が欲しいというUCの学生の要望を受け、来年(2003年)から大阪でインターンシップのプログラムを開始します。

- 具体的にはどのようなプログラムですか。

福来 大きく分けると二つあります。一つは春休みまたは夏休みに3~4週間の短期で集中的にインターンシップを行うもの。二つ目は学期中に10週間参加するプログラムです。週に時間を決めて企業でインターンシップするというものもあります。

最初はパイロットスタディとして5~10人規模で実施する予定です。大阪の方々とは2月末から始めようと話していますので、2月のプログラムの様子を見て、7~8月にも同規模で行い、その後徐々に拡大していければと考えています。

さらにUCから毎年、東南アジア諸国の提携校で学ぶ優秀な学生が何百人といますので、その人達が夏休みや春休みを利用して日本でインターンシップできるといいのではないかと思います。UCのプログラムも現在では中国、韓国との交換がメインになっていて、数としては日本の倍以上です。中国とのプログラムは始まって10年余りですが、中国の提携校で勉強するUC学生の数は年々増えていますね。逆に日本で学ぶUC学生は、はっきりいって減少しています。協定校を増やしてもなかなか来日する学生が集まりません。そういう意味でも魅力のあるプログラムを作っていけないといけませんね。

- 日本の大学では英語で専門科目の授業を受けることがなかなかできない、また英語で教えられる教官も少ないとも聞きます。これも日本に留学する魅力が減ってきたことと関連しているのでしょうか？

福来 原則的には、日本には日本語ができないと来られないのです。ですから、どうしても言葉の壁はありますね。また、70~80年代はジャパニーズミラクルに学ぶということで日本語ができる学生も多く、日本学(ジャパノロジー)も学問的に絶賛されていたのですが、日本経済が低迷するこの10年くらいは相対的に減っています。教育は経済とも関連していますので、学生の視点が変わって来ているのだと思います。

- インターンシップの地として東京ではなく大阪を選ばれたのはどうしてでしょう。

福来 東京でも一応経団連の方と話したのですが、東京ではいつでも始められますし、まずは大阪でと思いました。大阪の方が自治体としてサポートしてくれる体制も整っていますし。産業の空洞化が激しいといわれる大阪ですが、大阪の経済界や行政の関係者とも協力してUCの学生を送り込むことによって、プログラムが根付く何年後かには大阪にも何らかの還元ができると思います。

また現在進行中の新しい案として、大阪市立大学・大阪大学が中心となって作る大阪の大学コンソーシアムとUCシステムと提携して交換プログラムを立ち上げたいと思っています。現在の提携校のような大きな総合大学以外にもコンソーシアムの中には短大・高専などで学ぶ優秀な学生がたくさんいるわけですから、そのような方がUCで勉強できる交換留学プログラムを大阪コンソーシアムと行えるように考えています。

この企画は既にカリフォルニア大学に提出しており、現在はその結果待ちです。おそらく実現には数年はかかるでしょう。時間はかかっても、ひとりでも多くの優秀な学生の皆さんにチャンスを与えることは必要ですし、コンソーシアムという一つのアイデアのもとで、優秀な学生、意識の高い学生がUCにどんどん入れば、UCと日本の大学教育の活性化も図れるようになるのではないかと思います。

■ アメリカの大学教育の魅力

- 少子化によって大学の存続というものが取り沙汰され、国立大学は独立行政法人化や統合で揺れていますし、私立大学は優秀な学生の獲得に危機感を募らせています。そのような中で、日本の大学ではなく海外の大学に進学する人も増えているようですね。どこかの予備校のアンケート結果で、大学進学希望者の30%以上がアメリカの大学に留学したいと考えているというデータを見たことがあります。

福来 日本の一流大学でも10年前に比べて志願者は大幅に減少しています。学生はどこに行ったのか？もちろん少子化で数自体が減っていることもありますが、アメリカやヨーロッパ、中国や東南アジアなど他国で勉強する学生が増えています。アメリカでは原則的に入学試験というものがなく、高

校の成績等で進学校が決まります。例えばUCには入れなくても市立大学やコミュニティーカレッジは18歳以上なら誰でも入学できますし、成績がよければ四年制大学の3年に編入できます。

- アメリカの大学では、例えばホテル学やエンターテインメント学など、日本ではなかなか学問として確立されていないような学問が発達している点も魅力ですね。

福来 カリフォルニアにはUC (University of California) が9校、州立大学 (California State University) が23校あります。UCはそのトップ12.5%に入学資格があり、州立大学は33.3%です。コミュニティーカレッジは108校あり、州立で全員入れます。

UCでは教養課程は300~800人という大規模クラスですが、コミュニティーカレッジでは20~40人という教授とのコミュニケーションが密に取れる規模で行います。職業訓練・生涯教育と教養課程終了が主な目的となっています。カリキュラムは、不動産や看護婦の資格取得、接着工を目指すクラスなど、大学でこんなことをやるのかと驚くような内容もありますね。カリフォルニアでは1単位が11ドルです。1つのクラスで大体3単位ですから、約4000円で1つのクラスが教養課程を含めて取れます。1年間で前後期あわせても大体4万円程度の授業料です。

コミュニティーカレッジの若い学生の多くはトランスファーでUCかCSUの3年生に編入できるシステムになっていますから、UCの卒業生の3割はコミュニティーカレッジでスタートしていますよ。

実はまだプロジェクトにはしていませんが、UCだけでなく州立大学やコミュニティーカレッジも取り込んで、日本の大学との提携プログラムを作りたいと考えています。UCは経済的に恵まれた家庭の学生が比較的多く通う大学ですが、州立大学やコミュニティーカレッジも取り入れたプログラムができれば、中産階級やいわゆるマイノリティ、ヒスパニック系や黒人や東洋人の学生も日本に来ることができます。また、日本からもまずコミュニティーカレッジで1~2年の教養課程を終わらせて編入したり、多彩な職業訓練クラスを受講したりできます。これはコンソーシアムのような大きな枠組みと提携してやりたいですね。コンソーシアムには短大や高専や専門学校も加盟していますから。UCシステム、CSUシステム、コミュニティーカレッジシステムの総元締めとして意思決定をする機関がありますので、来年の夏頃までに一つのプロポーザルを出したいと思っています。

- 実現できればかなり面白そうなアイデアですね。教育には時間とお金がかかりますから10年スパンで考えていかないと成果は上がらないかもしれませんが、日本の大学が生き残りの手段として、あるいは国際競争力を高めるためにこのような試みに目をつけることには賛成ですし、今後、大学のあり方がもっと開かれたものになると期待しています。

ところで、アメリカで学ぶ日本人学生と同様に、アメリカで教える日本人教官も増えているのでしょうか。

福来 教えている人もいますが、中国や韓国、そしてインド、中南米やヨーロッパの人に比べると断然少ないですね。私がいるUCサンタクルーズ校の日本人教授は数学、言語学と社会学の3人だけです。人数的には過去10年ほとんど変わっていません。

UCでポジションを得る競争はかなり激しく厳しいものです。私のポジションにも当時200人以上の応募がありました。論文を発表するなどして学者としての地位をある程度確立しないと難しいですね。UCの場合は助教授でも契約書が必要で、6~8年の間に学者としてどんな出版をしてきたか、教授として教えられるのかなど様々な点から総合的に判断されます。また、他の大学もそうですが、自分の大学で出したPh.D.は自分のところでは雇わないのです。その大学の出身者が有利になる日本の大学のシステムとは反対ですね。

■ TOEFLについて

- コンピュータ版TOEFLではライティングがセクションとして組み込まれ、ペーパー版TOEFLでもTWE (Test of Written English) の受験が必須になっています。また次世代TOEFLではスピーキングも導入され、聞いたことをまとめて話したり書いたりという統合スキルも求められます。TOEFLのスコアユーザーであるアメリカの大学の立場としてこのような変化をどのようにお考えですか。

福来 アメリカの大学の授業では絶対にペーパーを書く機会があり、どうしても書く力が必要になりますね。特にUCは3、4年生になると必ず論文を書かされます。社会系、文系では作文の能力を実践的に活用できるかが問われます。大学院に行ったらそれこそ全部ペーパーというところも少なくありません。

今、私は日本の大学でも教えていますが、学生自身の思考や考え方がよく見えません。学生は試験やペーパーのなかで「先生が求めている答え」を探しています。結局自分で考えていないのです。彼らにとっては、探す答えがなければテストにならない。私は答えのないテストを目指しています。

- その点からすると、より論理的な分析力や構成力、更には相手を説得できる論旨の展開力がなければなりませんね。日本の教育ではこのような訓練を受ける機会がなかなかありませんから、中国人や韓国人の方が留学に有利になるのでしょうか。

福来 私の学部の大学院に多くの留学生が応募してきますがGREなど、欧州人や中国人はほとんど満点ですね。日本人は語学（verbal）で470～480点くらいです。実際に考える能力に大きな違いがあるというよりは、訓練の問題ということもあります。UCではSATをやめる動きもありますが、それは受験予備校に行けば必ず点数が上がるからで、またその受講料がとても高い。そのような高額な学費を払える人は限られてきます。また、設問にも社会的、人種的なバイアスを感じるがあります。このような理由からUCではSATを使わなくなる方向ですが、TOEFLをやめる動きはありません。昔はミシガンテストなどたくさん競争相手がありましたが、結局TOEFLが勝ち残りましたね。

ただ仙台を始め、地方でコンピュータの試験会場がなくなったのは困りました。TOEFLの受験機会が少なくなったことによって東北大学などからUCに留学する学生が減ってしまうと、UCから送れる学生の数も減ってしまいます。地域の格差なく、いろいろな人に受験のチャンスが与えられればと願います。

- 現在はちょうど2004年導入の次世代TOEFLに向けた過渡期でもあり、昨年5月末以降、日本でも地方の方には暫定的にご不便な状況となっています。TOEFL主催団体であるETSでは、代替のペーパー版試験の拡充などで地方の受験ニーズに対応する予定ですので、今しばらくご辛抱いただければと思います。本日は、興味深いお話をお聞かせいただき、ありがとうございました。

（インタビュー：TOEFL事業部長 高田 幸詩朗/2002年10月8日）

新シリーズ 世界で学ぶのはじめの一步

●●● アメリカ編 ●●●

日米教育委員会 (JUSEC) 教育情報部 渡邊 美由紀 氏にインタビュー

CIEEは各国への留学を考えている皆さんを応援しています!!

新シリーズでは、留学への「はじめの一步」を踏み出すための情報をお伝えしていきます。分かっているようで実ははっきりと把握できていない各国の留学情報を、公的情報機関を訪問して専門家に伺います。初回は日本からの留学先として最も人気の高いアメリカを取り上げ、日米教育委員会の教育情報部コーディネーターの渡邊 美由紀さんにお話を伺いました。

■ 日米教育委員会について

- はじめに、日米教育委員会はどんなところですか？

渡邊 日米教育委員会は、日米両国政府の半々出資で運営されている公的機関です。日米教育委員会では、フルプライト奨学金事業に加え、教育情報部を設け、主にアメリカの大学、大学院に留学される方への情報提供と相談に応じております。アメリカの国務省教育関係のECA (Bureau of Educational and Cultural Affairs) の管轄下にもあり、そのECAが指定しているOverseas Educational Advising Centersの一つです。ECAが管轄しているOverseas Educational Advising Centersでは、アメリカの教育の「正確、最新で、公正な情報」を提供することを第一の目的としています。

- どのようなサービスがありますか？

渡邊 主に留学希望者と相談に応じるアドバイザーを対象にサービスを提供しています。留学希望者を対象としたサービスは、アメリカの大学・大学院留学に関する情報提供、説明会などのプログラムの開催、留学相談などです。情報は、図書室における資料や[ホームページ](#)を通して入手することができます。また、業務内容の概要は、[ホームページ](#)や電話の自動音声サービスでも入手できます。

プログラムは、毎月東京で開催する大学学部・大学院課程別の「留学説明会」、秋に開催される全国各地での「留学相談会」と東京・神戸での「アメリカ大学留学フェア」があります。また、5月には留学が決定した方を対象とした「渡米前オリエンテーション」を東京と大阪で開催しています。相談会やフェアでは、CIEE TOEFL事業部にご協力いただき、「TOEFL説明会」も同時開催しています。相談業務は、図書室カウンターにて随時行っており、電話やEメールでも受け付けています。また、留学手続きを開始し、具体的なご質問のある方は、予約の上、約30分の個人相談も行っています。私どもでは、ご自分の力で留学を実現させる意思のある方を対象に、無料でサービスを提供しています。留学手続きの代行は行っておらず、ご自分で調べ手続きする上での留学相談です。つまり、調べ方や手続きの仕方という「方法」については積極的に相談に応じておりますが、あくまでもそれを行うのは留学するご本人です。私どもでは、留学希望者が、準備段階から主体的に留学に取り組む姿勢が重要であると考えています。留学は渡米してから始まるのではなく、留学の準備段階からすでにスタートしています。それは、ひとつの異文化体験の入口でもあり、人生の中で留学を貴重な経験とするための、大切な学びのプロセスでもあるからです。



留学相談に応じるアドバイザーを対象としたサービスとしては、情報提供と、研修を実施しています。アドバイザーの為の情報は、[ホームページ](#)で提供し、アメリカ留学に関する基本資料のリストや、教育機関別と相談内容の項目別に情報収集に役立つリンク集が掲載されています。研修は、毎年ではありませんが、秋の「アメリカ留学相談会」の時期に合わせて、全国各地で「アメリカ留学相談に応じるアドバイザーの為の説明会」を開催し、アメリカ留学の最近の動向、留学の最新情報、相談の受け方に関する説明を行っています。また、JAFSA（国際教育交流協議会 Japan Network for International Education）主催による「留学送り出し担当者の為の初任者研修」も毎年1回開催しています。最近では、アメリカ大学への進学を志す高校生の増加に伴い、高校の先生を対象とした「アメリカ留学希望生徒の進路指導」の研修も、要請に応じて実施しています。

- 頻繁に相談に来られない地方の方は、どのように進めればいいのでしょうか？



個人相談の様子

渡邊 まず、ホームページの「[手引](#)」をご覧ください。留学するために必要な基本事項をおさえてください。留学準備プランやスケジュールの立て方に関しては、「アメリカ大学留学の手引」や「アメリカ大学院留学の手引」の最終ページにある「留学手続きチェックリスト」を参考にしてください。留学準備は早めにとりかかることがとても重要です。少なくとも留学を希望する時期の1年前から準備を開始してください。秋には、札幌、仙台、名古屋、京都、大阪/神戸、福岡、沖縄で「留学相談会」を開催しています

ので、その地域にお住まいの方は、是非相談会にご参加ください。相談会の日程や参加方法は、夏頃[ホームページ](#)に掲載されます。出来れば留学を希望する2年前開催の相談会で、（グループによる）留学説明会にご出席になり、その後、大学について調べたり手続きに取り掛かり、留学する1年前の相談会では、具体的な質問事項をまとめて、個人相談をお受けになることが理想的です。随時、手続きの過程でわからないことがあれば、遠慮なく日米教育委員会・教育情報部へお問い合わせください。当部では、Eメールによるご質問にも応じています。

今後は、ホームページ上で、各留学準備段階における情報や手続き方法を示した"Step by Step Guide"の掲載を企画中で、インターネットが使える環境にさえあれば、どこからでもホームページのステップを踏んで留学手続きが進められるよう改良する予定です。しかし、ホームページに書かれたものを読んだだけでは、じっくりといかない面もあるので、実際アドバイザーと直接話して相談できる時間や機会も同時に増やしていくつもりです。

- しっかり調べればWebに載っていたようなことを質問しても大丈夫ですか？

渡邊 全く構いません。留学について調べるサイトのほとんどは英語で書かれていますし、初めて留学を志す方は、自分にとって必要な情報に行き着くこと自体も大変だと思います。ですから、自分にとって適切、かつ信憑性があるサイト、同じホームページ内でも自分に必要な情報にたどり着くまでの方法は遠慮なくお尋ねください。

- 日本人以外の留学希望者はどのようにすればいいのでしょうか？

渡邊 日本人以外の留学希望者に対しても同じように情報提供をしています。日本語で書かれた手引の代わりに、アメリカ国務省のECAが出版している"If you want to study in the US"という英文書籍を図書室にて無料でさしあげています。この書籍は、[ECAのホームページ](#)でもご覧になれます。また、ECAのホームページには、[アメリカ留学希望者向けの情報が英文で掲載されているサイト](#)がありますし、自国にECA管轄下のOverseas Educational Advising Centerがあれば、そこのホームページで母国語による留学情報を得ることができます。もちろん、日米教育委員会・教育情報部にお問い合わせいただければ、英語と日本語のみですが、ご質問・ご相談に応じます。

ビザに関しては、アメリカ大使館・領事館が管轄で、当方では責任を持ったお答えができませんが、ビザは、自国のアメリカ大使館・領事館に申請することが原則となっていますので、その点留意が必要です。

■ アメリカ留学状況

- 日本人の留学生数は増えているのでしょうか？

渡邊 アメリカの大学・大学院に留学する日本人の数は、最近の10年間、ほとんど変わっていません。アメリカIIE(Institute of International Education)の公式情報"Open Doors"の統計によれば、2001～2002年度の日本人留学生数は46,810人で、前年度比0.7%増です。9月11日のテロの影響が心配されましたが、結果的にはほぼ横ばいでした。日本は、1998年まで、アメリカにおける留学生の出身国で1位を占めていましたが、ここ数年、インド、中国、韓国からの留学生が急増し、現在では4位に下降しています。

- こちらに相談に来られる方の傾向はどのようなものですか？

渡邊 最近では女性の留学希望者が増えている傾向が顕著です。また、当教育情報部の利用者は、大学院留学希望者が多いことも特徴的です。IIEの統計によれば、アメリカで学ぶ日本人留学生は、学部課程が半数以上を占め、大学院生の割合は20%ですが、当部の利用者の約半数は大学院留学希望者で、毎月行われる説明会では、大学院の参加者数が学部留学希望参加者数を上回っています。その他の傾向としては、2年制の公立大学であるコミュニティカレッジを希望する方が増えていることです。アメリカにおけるコミュニティカレッジは、主に地域住民のために安い授業料で教育の機会を提供することを目的としており、幅広く教育の門戸を開放しています。最近では、積極的に留学生を受け入れるコミュニティカレッジも増加しており、日本人留学希望者にとっては、入学し易さやコスト面での魅力に加え、4年制大学へ編入できる可能性を見込んでのコミュニティカレッジへの留学を志す方が増えています。一方、コミュニティカレッジは、日本における専門学校的な役割も果たしており、職業・技術訓練を目的としてアメリカのコミュニティカレッジを目指す方もいます。また、最近では高校から直接アメリカの大学へ進学を希望する方も増えています。それらの高校生は、アメリカの大学留学のみに絞っている方と、日本とアメリカの大学を併願する方の両方がいらっしゃいます。アメリカに留学する日本人の希望専攻分野は、学部、大学院課程共に、経営学が最も人気の高い分野です。留学希望者の中には、日本の大学を卒業して直ぐにアメリカのビジネススクールでMBAの取得を目指す方も多いですが、アメリカの多くのビジネススクールでは、仕事経験を有することが出願資格の一つになっています。たとえ仕事経験を要求せず、ビジネススクールに入学できたとしても、留学後授業で、仕事を通じた事例や経験に基づく意見が求められる場合が多いため、新卒でビジネススクールに留学した場合は、授業についていくことに困難が生じることが多いようです。

■ アメリカ大学の魅力

- アメリカ大学への留学の魅力や、日本の大学にない部分はどこでしょうか？

渡邊 アメリカ大学の特徴、あるいは魅力とも言えるのは、多様性と柔軟性だと思います。ひとつには学生の多様性です。アメリカは、世界一多くの留学生を受け入れている国です。また、一言でアメリカ人といっても、様々な民族的、文化的背景を持った人々で構成されています。さらに、アメリカの大学では、幅広い年齢層の学生や豊富な仕事経験を有する学生が学んでいます。つまり、アメリカ留学は、学業的意義に加え、日本の大学では接することのできない多様なタイプの学生と交流し、違った考えを持つ人々と意見を交わすことのできる貴重な異文化体験ともなります。留学経験者のほとんどは、「アメリカの大学での様々な人々との出会いが、人生の中でのかけがえのない経験となった」と口をそろえておっしゃいます。最近では、通信教育などで日本にいながらにしてアメリカ大学の単位を取得することもできますが、留学の醍醐味は、テクノロジーを通しては感じることのできない触れ合いや心の交流にあるのではないのでしょうか？教育交流の目的は、「人間として共通の感情を喚起できること、言い換えれば、他の国々に自分達が恐れる教条があると理解するのではなく、自分達の国で育った人々と同じように喜びや悲しみ、残酷さややさしさを共感できる人々が住んでいる、ということが実感できれば充分だと考えます。」と述べたフルブライト氏の言葉に集約されます。そして、それこそがフルブライト氏の信念であると同時に、私ども日米教育委員会の理念でもあるのです。

もうひとつは、アメリカ大学のプログラムの多様性です。図書室にある"Index of Majors and Graduate Degrees"(College Board出版)という本をご覧になるとわかりますが、アメリカの大学では実に多岐に渡る専攻分野が設けられています。また、ひとつの分野でも、科目内容が多様で、各大学が独自のユニークなプログラムを提供しています。ご自分に興味のある分野、あるいは追究したい課題が特殊で、日本の大学では学ぶことができないような内容であっても、アメリカの大学には、どこかの大学で扱っている、あるいはその分野を研究している教授が見つかるかもしれません。

- 柔軟性というのは？

渡邊 アメリカの教育制度は、日本と比較して柔軟です。アメリカには日本の文部科学省のような国全体の大学を認定する政府機関はありません。それに代わって、民間の非営利団体でAccrediting Associationsと呼ばれる認定団体がその任を担っています。アメリカの認定基準は、日本と比べてかなり緩やかで、各大学の教育方針に応じて認定が与えられます。そのため、各大学は、独自の教育方針に従ってユニークな教育の機会を提供するとともに、社会・学生のニーズや時代の変化にすばやく対応して、柔軟にカリキュラムを改定します。アメリカには、教育は一種の商品で、大学はその商品の売り手、学生はその買い手といった考え方が一理あります。大学は、顧客である学生の要求を満たすための商品開発やサービスの提供を心がけています。そのため、学生が学びやすい環境や柔軟な制度、例えば、働きながらパートタイム(*)の学生として勉強できる機会や、他大学との単位互換、休学制度、編入制度などが整っています。日本では、他大学へ編入したり、専攻分野を変えるのは大変ですが、アメリカでは比較的容易にできます。

*注：アメリカ人が対象。留学生はビザの関係上、必ずフルタイムの学生として在学し、パートタイムでの勉強は不可。

- アメリカで全く違うものにチャレンジするという事も可能ですね。

渡邊 可能です。例えば、学部課程の専攻と分野を変えて大学院へ進学することも可能です。特にビジネスや法律などのプロフェッショナルスクールに入学する学生は、学部課程での専攻が異なる分野であることの方が一般的です。但し学術的な分野の大学院の場合は、希望専攻分野の基礎的科目を既に修めているか、あるいはその分野に関する一定の知識や経験がないと入学できないこともあります。アメリカでは、「変化することは良いことだ」という通念が一般的にあるように思います。専攻分野を変えての留学に言及すれば、その人の中で、一貫して「変えるもっともな理由、動機付け、方向性」がはっきりとしていれば、ネガティブには捉えられません。アメリカでは、より良いチャンスを求めて、変化をいとわない価値観があります。

また、アメリカは「チョイスの国」でもあります。レストランに行っても「ドレッシングは何にしますか?」というように、多くの選択肢の中から、自分に合った、あるいは自分の望むものを自分で選ぶことができる社会です。大学に関しても、その数の多さに加え、各大学が異なる特徴を持ったカリキュラムを提供していますし、留学方法も様々です。その多様なチョイスの中から選ぶのはあなた自身なのです。それに関連して言えば、アメリカは「自由と責任」の国でもあります。選ぶのは自由ですが、その責任は自分で取らなければなりません。留学を希望する方の多くが、自由な側面に引かれて、アメリカを留学先に選びますが、自由のもう一方の側面である責任が見落とされがちです。自由には必ず自己責任が伴います。アメリカ留学を志す方は、自分の方向性を自分で選び、その選択に責任を持つ(matureな)大人としての態度が求められます。

- 皆さんどのような目的で留学されているのでしょうか？

渡邊 留学の目的は、個々人様々です。留学を志すにあたり、留学目的を明確にすることが準備の過程で最も重要です。留学目的にはどのようなことが考えられるか、アメリカにはどのような大学・専攻があるのかといった選択肢に合わせて自分の方向性を決めるのではなく、留学するご自身が主体となって、何故留学したいのか、自分の夢を実現するには、どの大学でどの分野を学ぶのが最適かをご自分で発見してください。場合によっては、アメリカ以外の国への留学や日本でも学べる可能性があるかもしれませんが、留学そのものが最適とは限らず、仕事やインターンシップなどの経験を積むことの方が、その夢を実現する手段として相応しいことを発見するかもしれません。

明確な留学目的と将来展望は、今後のご自分の方向性を見出し、大学選択を行う上でも重要であると同時に、大学院に留学する方は、出願書類のひとつであるStatement of Purposeにも反映され、可否にもかかわってきます。

相談の際、留学について掘り下げてお話を伺っている中で、動機が明確になってくることもあります。志望者は、動機から大別すると「留学を将来の仕事などに役立たせたい」という将来志向型と、「留学が将来役立つかどうかはわからないが、今自分に興味のあることを学びたい」という現在重視型がいらっしゃいます。いずれにしても、自分の気持ちを偽らず、正直に見据えることが重要であると思います。特に高校生などは、自分に合った専攻分野や将来の方向性が明確になっていないことの方があたりまえとも言えますので、「アメリカの大学で、いろいろなタイプの学生と接し、様々な科目を学ぶ中で、ご自分に合ったものを発見するために留学する」ことも、正直な目的となりえるのです。動機付けが曖昧であることに引け目を感じる必要はありません。留学を志すこの時を、ご自分を見つめなおす機会として活かし、正直に自分自身と向き合ってください。もし、動機を明確にする過程で、相談が必要とお感じになったら、遠慮なく、日米教育委員会へお問い合わせください。

- ビザは最近取りにくくなっているのですか？

渡邊 特にそのような傾向は見受けられません。但し、以前より、ビザ申請から取得までに要する時間が長くなっています。また、ビザの申請書類や申請料、申請方法などが頻繁に変わりますので、ビザを申請する際に、最新情報をアメリカ大使館・領事館のホームページでご確認ください。なお、日米教育委員会のホームページにも「[ビザ申請のために必要な書類](#)」があり、随時更新されています。

学生ビザ(F-1/M-1)や交流訪問者ビザ(J-1)はいずれも非移民ビザですので、留学などの目的を達成した後は自国に帰ることが原則です。したがって、留学後にアメリカに残って仕事をしたい、あるいは永住したいといった意思が見受けられた場合には、ビザの発行が拒否されます。

■ 留学準備に関して

- 英語の準備はどのくらい必要ですか？ TOEFLは皆さんご存知ですか？

渡邊 大体TOEFLが必須であることはご理解いただいているようです。ただ、地方の方は、CBT(コンピューターテスト)センターが閉鎖されてペーパーテストに戻ってしまったことで受験機会が減り、長期的に計画を立て、早めに準備しなければいけないとの情報がまだ行き渡っていない可能性があります。大学の締切日に応じて間に合うように受験し、スコア提出をする計画性と早めのテスト準備が大切です。

- アメリカ留学にあたって、やはりTOEFLは必須ですか？

渡邊 英語研修の場合はTOEFLなしで留学できます。また、Bridge - Programと呼ばれ、英語研修と大学の正規プログラムが連携しているような場合は、まず英語研修について英語力が伸びれば大学に進学できます。大学学部課程への英語の条件付入学の場合は、TOEFLスコアも含めて必要書類を大学に提出します。英語の条件付入学制度がある大学でも、条件付で入学したいと学生側から希望を出すことはできず、大学が入学審査を行い、英語以外の入学資格が基準に達している場合に、大学側が英語の条件を付けて入学を許可します。稀に、質の高い大学でも出願書類にTOEFLを課さないというところもありますが、結局入学後に英語のPlacement Testを受け、英語力が基準に達していない場合は正規プログラムに入学することはできません。いずれの場合も、大学の正規のプログラムに入るには、大学が定める英語力の基準に達していなければなりません。



- 留学、留学生生活を成功させるために英語以外ではどのようなことが必要ですか？

渡邊 まず、日本語でも構いませんので、ご自分の意見を持つということが重要と考えます。アメリカは自己主張の国です。日本は、どちらかという自分の意見を控えてでも皆と協調することが重んじられる社会ですので、その日本文化から、アメリカ文化への適応は容易ではありません。アメリカ留学を志すかたは、日本にいる間から、ご自分の意見を持ち、それを言語化して述べることのできる習慣を身につけておくことです。さらに、それを英語で表現できるような訓練をすると役立ちます。アメリカの大学の授業では、ディスカッションなどで活発に意見が交わされますので、その中で、ご自分の意見を英語ではっきりと述べる能力が求められます。

- 自己主張することを心掛けるために、日本にいる間にその力を身につけていくにはどのようにすればいいでしょうか？

渡邊 これはよく説明会でもお話することですが、課題が与えられたら、常にご自分がどう考えるか、そして、それを英語でどう表現するかを習慣づけて繰り返し練習することだと思います。例えば、テレビのニュースを、「ああ、いま世界ではこういうことが起きているのだ」と受身で見るだけでなく、この課題に対して自分はどう考えるか？賛成なのか反対なのか？賛成ならばなぜ賛成かを考えて、英語で口に出して言う、あるいは書くことを試みてください。

- 留学生生活を成功させるために、その他考慮すべき点はどのようなことがありますか？

渡邊 生活と勉強の両側面において、積極性が重要であると思います。疑問点があったら、自分から積極的に質問し、悩み事があったら、一人で抱え込まず、自分から助けを求めることです。特徴としての柔軟性でも触れましたが、アメリカの大学は、学生を顧客とみなし、学生のニーズに合った質の高い教育の提供に加え、留学生アドバイザーや専門のカウンセラー、勉強の手伝いをするチューター制度、レポートの書き方指導をするライティングセンター、健康管理を行うヘルスセンターなど、様々なサービスの提供を心がけています。アメリカには、以心伝心の文化はなく、黙っていても雰囲気を感じて手を差し伸べてくれることはありませんが、自分が困った、悩んでいる、と言葉に出して助けを求める行動にできれば、真摯になって相談にのってくれたり、状況に応じて対処してくれる柔軟性があります。積極的な態度が重要であることは学業面でも同様です。アメリカで学生は、受身で学ぶのではなく、主体的に自ら学ぶという積極的な態度が求められます。アメリカの大学では、学生が本来持っている潜在的能力を伸ばすための教育環境が常に模索されており、やる気のある学生に対しては教授も非常に協力的です。

積極的な姿勢で、自らが主体性を持って臨むことが、アメリカ留学生活に適応し、留学が実り多き体験となるための秘訣と考えます。

- 常に責任をもって自分で頑張る心掛けが大切ということですね。本日はどうもありがとうございました。

日米教育委員会 教育情報部

東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル206号

*地下鉄 銀座線/丸ノ内線 赤坂見附駅下車

*半蔵門線/有楽町線/南北線 永田町駅下車

地図は[こちら](#)

03 - 3580 - 3231

<http://www.fulbright.jp/>

【図書室のご利用案内】

- ・ 利用時間：月曜日から金曜日の午前10時から午後5時まで
- ・ 休館日： 土・日・祝日、アメリカ独立記念日（7月4日）、クリスマス（12月25日）

（インタビュー：TOEFL事業部 峯 純子）

英語に限らず外国語を学習していると、言葉の世界の奥深さに気付かされます。古来の日本人は言霊（ことだま）と評して、言葉には霊が宿り、見えざる力を働かすのだと考えました。使い慣れた短いフレーズの中にもコミュニケーションを左右するほどの力があるのです。ご好評頂いている連載「言葉の玉手箱」では、ETS公認コンサルタントの川手 ミヤジェイエフスカ 恩先生が、異文化間コミュニケーションにおける言葉の使い方の重要性に焦点をあて、興味深く解説してまいります。言葉の世界の面白さをお楽しみください。



■ Dr. 川手 ミヤジェイエフスカ 恩（めぐみ） ■
(Megumi Kawate-Mierzejewska, Ed.D, Temple University Japan)

【経歴】

テンブル大学集中英語課程 助教授
2000年より、ETS公認コンサルタントを務める。

専門：中間言語語用論 (Interlanguage Pragmatics)

第4回： 'I will take a rain check.'



今回は断りの方略について考えてみようと思う。断りといっても依頼、招待、提案、そして提供（申し出）に対するものが考えられるが、今回は招待に対する断りに焦点をあててみよう。お誘いを受けた時、相手に不愉快な思いをさせず自分の意図を伝え、以後の関係もポジティブに保てるような断り方はないものだろうか。

筆者が学生でアメリカにいた若かりし頃、こともあろうに試験の数日前にあるアメリカ人男性から電話がはいった。この男性は筆者も多少面識があり、なかなかの人物であった。外見に関して言えば、いつスクリーンから飛び出してきたもおおかしくないというものであった。ある筋によると、彼は筆者にそうとう熱をあげていたらしいが、かなりの自意識と高いプライドをもった男性であった。その彼が意を決して食事に行こうと誘ってきたのだが筆者はそっけなく 'Well, I can't make it because I'll have to study for the exam on weekend.' と言ってしまったわけである。つまりなんの飾りもつけずに意図を伝えただけなのであった。 'I would love to, but ...' なんて言う表現すら使わなかったのだ。にもかかわらず、筆者は、試験が終わってから誘われたら絶対に行こうなんて考えていたわけである。もちろん、それ以後お誘いを受けることはなかったのであるが。



後に彼が筆者の友人にもらしたことから察すると、彼は「筆者は彼に全く脈がない」という結論を下したらしい。何時間かの食事をするのが試験勉強の妨げになるはずもなく、かえって息抜きになり勉強もはかどるだろうに邪険に断ってきたというものであった。それを聞いた時、筆者は思った。あの時は試験のことで頭がいっぱいで相手の気持ちなど考える余裕もなく自分本位で事実だけを伝えてしまったがコミュニケーションを円滑に運び、相手に不快感を与えず真意を伝えるためには表現に飾りをつけたり工夫をしたりすることも大切なのだ。更にあの時、状況を説明した後 'I will take a rain check.' とでも言っておけばよかったのになど考えたのであった。

以上、筆者の苦い体験をもとにお誘いに対する断り方を探ってきたが、また誘ってほしいときは 'I will take a rain check.' という表現を付け加えておくといいようだ。

川手 恩 テンプル大学ジャパン

～私もTOEFLを受けました～

これまで登場していただいたTOEFL受験者の多くは、これから海外へ留学をしたり、英語力をアップするために、英語の勉強に取組み、TOEFLと格闘している方々にスポットを当てて参りました。今回は、『私もTOEFLを受けました』と題して、TOEFLスコアを携え、既に海外にて活躍している元TOEFL受験生に、勉強法や留学を志す方へのアドバイスなどのインタビューを試みました。まっすぐ自分の将来を見据えて勉強に打ち込まれている様子が目に浮かぶようなインタビューとなりました。ご協力ありがとうございました。

☐☐☐ 受験者データ ☐☐☐

名前： 石原 千加枝
 年齢： 23歳
 性別： 女性
 ご職業： 学生：ロンドン大学（アジアアフリカ学院東アジア学部）
 CBT受験回数： 3回
 将来の夢： 混ざり合うことが難しいとされる西洋と東洋の思想や哲学を組合せ、どんな人にも受け入れやすいアイデアを生み出すこと。
 インタビュー日：2003年1月20日（月）



- そもそも、『英語』という言語に興味を持たれたきっかけは？

中学入学まではまったく興味はありませんでした。ただ、両親の影響もあって海外の映画・演劇・音楽など、英語に接する機会には恵まれていたと思います。中学入学以降は、英語を学ぶことで得られるチャンスの多さに気づき、どんどん関心が強まっていきました。

- 石原さんは、英語習得に関して、どのような勉強をされてきたのですか？

中学校三年間は自宅近くに米軍基地があったことから、基地の中の先生に会話と発音を中心に習っていました。初めからネイティブの先生と話すことで、失敗を恐れることもなく、かなり柔軟に発音にも対応できたと思います。そして米軍基地内に頻繁に通うことで、英語以外のこともたくさん学ぶことができました。よく「とりあえず留学生活を始めてしまえば何とかなる...」というようなことを聞きますが、私自身の経験としては、この時期に積み重ねた基本的なことが、後々海外での生活を始めて本当に役立ちましたし、発音でも文法でも基礎をしっかり磨くことが大切だと思っています。

- TOEFLを3度受験されているようですが？

受験経験はペーパー版が2回（550、610）、コンピュータ版（273）が1回です。最初の2回はアメリカの大学へ出願するためでした。最後に受けたコンピュータ版はロンドン大学出願のためです。ただしこのスコアは参考程度でした。2つのTOEFLの印象は、コンピュータ版のほうが全体的に集中できたような気がします。特にエッセイは、普段からパソコンで打ち込むことが多いので、論理的に書き進めるのに、合っていると感じました。またコミュニケーションの英語「話す、聞く」と、学校（特に大学）で必要な英語は多少違いがあると思います。TOEFLは両方をうまく測ってくれる指標だと思います。

- TOEFLスコアアップのための勉強方法などはございますか？

特にTOEFLのために勉強したわけではないのですが、強いて言えば自分の興味のある分野の専門書を原書で読んだり、気に入った映画の原作本を原書で読んだりして、とにかくボキャブラリー強化に努めることでしょうか。新聞もそうですが、やはりネイティブの人が書いている生きた英語に数多く触れることで、エッセイの書き方の勉強にもなりますし、英語らしい言い回しなども身につきました。

- 留学生活を通して大事なことは？

楽をできる道を選ばないことが大切だと思います。今、どんな国へ行っても日本人の仲間がたくさんいて、日本にいるのと同じような生活をできてしまいます。留学始めは、その誘惑に負けそうになることもあるかもしれませんが、どんなに辛くてもそこを乗り越えることで、留学生活の価値が見出せるのではないのでしょうか。

- 海外での日本人の印象は？

日本人同士のまとまりは、どこに行っても感じます。ただ、それに固執してしまい、現地とのつながりが希薄になってしまうのも、また日本人の特徴かもしれません。常に自分がなぜ、海外で勉強をしているかの意味を問い直すことで、自分を見失わないでいられるのだと思います。

- お忙しい中、ありがとうございました。

（インタビュー：TOEFL事業部 渡邊伸雄）

[Back to Top](#) 

第1回 TOEFL研究セミナーのご報告

英語でのコミュニケーション能力と聞くと、すぐさま「聞く」「話す」能力を思い浮かべる方が多いでしょう。『コミュニケーション』という言葉が時代のキーワードとして巷に踊った結果、「聞く」「話す」は時代の寵児としてもてはやされ、「読む」「書く」はコミュニケーションと相反する旧態依然とした英語教育の遺物のように疎まれ軽んじられ、ともすれば忘れ去られがちです。

しかし、果たしてそれでよいのでしょうか。

上智大学外国語学部教授の吉田研作先生は、2001年度TOEFL-ITPセミナーの基調講演「21世紀の日本の英語教育」の中で、「リテラシー（読み書き）は、国際的な人間、いわゆる地球市民のバッジである」と語られました。「本当の意味で世界の中で日本人が英語を使いこなす、国際化を図っていくためには、読み書き能力が無ければどうしようもない」とも。

コミュニケーションとは、音と文字、つまりオーラシー（話す聞く）とリテラシー両方を総合的に含んだものでなければ意味がないのです。

「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能すべてを取り入れ、また個々の技能だけではなく、それらを総合的に用いた英語運用能力を測ることのできる次世代TOEFL（Next Generation TOEFL）のコンセプトもまさにそこにあります。

CIEE TOEFL事業部では、真に求められる英語運用能力の育成にスポットをあてた教育者対象の「第1回TOEFL研究セミナー」を昨年12月に下記の通り開催いたしました。Academic Writingの効果的な学習方法と指導方法をテーマにした今回のセミナーについてご報告いたします。

【第1回 TOEFL研究セミナー】

- 日時： 平成14年12月7日（土） 14:00～16:00
- 場所： 東京国際交流館 メディアホール
- 主題： アカデミック・ライティングや英語伝達能力育成に向けての効果的な学習方法とその指導方法
- 講師： ETS公認コンサルタント：川手 ミヤジェイエフスカ 恩 先生
(Megumi Kawate-Mierzejewska, Ed.D., Temple University Japan)
- 主催： 国際教育交換協議会（CIEE）日本代表部 TOEFL事業部
- 協力： 財団法人 日本国際教育協会



■ 【セミナーレポート】

師走に入った最初の土曜日、そぼ降る小雨に煙ったお台場エリアの会場に、首都圏を中心に遠くは岩手、関西からも続々と参加者がご来場されました。その数、総勢約80名。大学・高等学校の英語科教員の方々が大半を占めました。

CIEE TOEFL事業部本部長 兼 TOEFL日本事務局長の高田幸詩朗からの主催者挨拶の後、会場提供でご協力いただいた財団法人日本国際教育協会（AIEJ）を代表して同協会留学情報センター海外留学係長の大八木繁則氏にご挨拶と留学情報センターのご紹介をいただきました。

ETS公認コンサルタントの川手先生の講義が始まると、参加者の皆様は真剣に前方のスクリーンを見ながら、熱心に耳を傾けていらっしゃいました。



セミナーの目玉でもあるETSの新しいサービス、Criterion(SM) Online Writing Evaluation Serviceを使ったデモでは、サンプルエッセイをインターネットで送信してほんの10数秒後、見事に色分けされたフィードバックが映し出されたのをご覧になって、参加者からは思わず感嘆のため息が・・・。

教師がライティングの採点にかかる莫大な時間と労力を省き、それによって生まれる時間的余裕を個々の学生や生徒へのフィードバックに使ってもらうために開発されたこのオンラインサービスは、実用的な英語運用能力を養成する教育現場のモデルをドラスティックに変える画期的なツールとして今後注目を集めることと思います。

セミナー終了後は、現場で実際にライティングの指導にあたる先生方から様々な質問が挙げられ、研究セミナーの名称にふさわしい活発な質疑応答となりました。参加者の皆様からの積極的なご発言でなお一層有意義なセミナーにさせていただきましたことに心より感謝申し上げて、本レポートを締めくくらせていただきます。

これからもCIEE TOEFL事業部では英語教育の発展に少しでもお役立ていただけるよう、魅力的なセミナーを企画し、開催してまいります。当メールマガジンでもご案内いたしますので、機会がございましたら読者の皆様にもぜひご参加いただけますようお願い申し上げます。

大阪・TOEFL-CBTセミナー開催のお知らせ
このセミナーは、既に終了しております。

東京でご好評いただいているTOEFL-CBTセミナーを大阪でも開催します！

毎月1回東京で実施されている当協議会主催のこのセミナーを、大阪でも同様の内容でコンピュータ版TOEFLについて、ETS公認コンサルタントが詳しくご説明いたします。
今後TOEFLを受験なさる方はもちろん、興味のある方はどなたでもご参加ください。

日時：	2003年3月4日（火） 18:30～20:30
場所：	大阪中央公会堂 大会議室
定員：	80名 / 参加無料・要登録
アクセス：	<ul style="list-style-type: none"> ・地下鉄御堂筋線「淀屋橋」駅下車1番出口から徒歩約5分 ・京阪電鉄「淀屋橋」駅下車徒歩約5分

【会場のご案内】



本セミナーは、今後TOEFLを受験なさる方はもちろん、興味のある方はどなたでもご参加いただけるセミナーです。